

ると、もう時効だと思われたのでしょうか、中学時代の職員会議での私をめぐる議論とか、同僚教師の戦時中の言動とか、勤労働員の話とか、私達には判らなかつたいろいろな話を控え目ながら話して下さいました。過去のことをよく記憶している方だなあと感心したものでした。

#### 最 後 に

結局、私は先生の頻繁な採集旅行や冒険にお伴したことはありませんでしたが、峰越え林道、津川の赤崎山へ御一緒させていただいた2回だけでした。風呂敷と新聞紙を持

たれて、ゆっくりとあちこち観察して採集される様子を、非常に感銘深く思い出しております。暗くなっても平気で採集に没頭されており、視界が利かなくなってから、大急ぎで山を降りるなど、景色を眺めての常人の登山とは違った態度を覚えております。

最後に、御子息純一さんが、通夜の席だったかに話された言葉に、“父は自然を神として信仰しており、観察、研究に没頭していました”とありましたが、私もそれと同感ですし、私の理想でもありました。

いつまでも教導いただきたかった、尊敬する教師でした。

## 池 上 先 生 と の 採 集

川 端 義 一

縁あって福島県只見町の植物調査に一員として参加させてもらいました。池上先生も調査員に加わっておられ、何回か只見に同行させていただきました。その折りの話です。

1997年6月28日、朝、先生のお宅に伺い、先生に車で只見までご一緒いただきました。六十里越経由で、集合の約束の時刻があったので途中止まることなく集合場所まで走行しました。この時、先生は途中興味を引かれた所もおありだったのに採集できなかつたことを残念に思っておられたのでしょうか、後日、じねんじょの総会の折りに、最近はずでさっと通り過ぎて周りの植物を見たり採集したりしない、というような話をされ、身の縮む思いで聞いたことがありました。その日は只見で何か所か採集やら調査やらをし、只見に泊まりました。

先生は当時、一度に多くを召し上がれないので少しずつ時間をかけて食事をされていました。翌29日の朝も同様で、我々も傍らで話を伺っていましたが、結局、食事を終えられる頃には昼になっていました。その後、新潟へ帰ることになり、また同乗していただきました。

途中田子倉湖の一方所で、どちらが言い出したのかさだかではありませんが（たぶん先生が止まれとおっしゃるこ

とはなかつたと思いますから、私が言い出したのでしょうか）、車を止めて採集をしました。

斜面に送電鉄塔保守用の道がつけてあり、階段がつくってありました。先生は下で採集を始められたのですが、いつも通り遅々として前進されません。先生の体調を考えると先生は登られずに下で採集されるものと勝手に考え、私は保守用の道を登って、斜面や尾根の林を調べていました。調査を終えて下っていくと先生はまだ下で採集をされておられました。下の林や別の斜面の林を調べ、しばらくして、先生がおられた所へもどってみると、先生は山道を登っておられるではありませんか。心配なこともあり、再び先生と共に登り始めました。結局、先生は途中で引き返されることもなく、ゆっくりながら、尾根まで登られました。

さすがに下りてきた時にはあたりは暗くなっており、先生を促して帰路につきました。新潟のお宅に着いたときはずいぶん遅くなっており、奥様は穏やかに迎えてくださったのですが、内心ずいぶん心配されておられたと思います。大変恐縮しました。

この採集が先生との最後の採集になってしまいました。

## 池上先生の御指導に感謝して

小 林 巳 葵 彦

1968年3月23～24日に積雪数mの小千谷山本山でのじねんじょ会採集会が開かれた。24日に山頂から下山中の屋食場所で、「この雪の下にユキツバキがあり葉状苔がある」との池上先生の一声で、好奇心旺盛な若者が、3mほど掘り進むと蕾をつけ春を待っていたユキツバキが現われ、葉状苔が付着していた。池上先生には、雪の下まで見通す眼力が備わっているのだろうかと感嘆するが、その後の調

査やお話の中に、人間離れした？素晴らしい能力や発想力を感じるが多々あった。先生の話には、終わりが無く常に夢が広がり、いろいろな繋がりがネット状に展開する。そして気付いた時には先生の話にのせられているというか、しなければならぬ雰囲気になっていた。しかし結果として、時間が経過すると自分の能力不足を感じるが多かったが、先生の幅広く奥の深い知識に裏打ちされた

お話、その根底にある先生の資料整理は大変勉強になった。ただ、先生からお借りした野帳は、種々の記号が多く、直接先生にお聞きしても解説は難しかった。

不思議な力：先生と一緒に採集会（山行）は、土砂降りになるだろうが、風が強くなるだろうが、夜になるだろうが、どんな状況になるだろうとも不安が全く出てこない。水の無い場所の幕営では、必ず雨が降り水の心配もいらなくなる。普通の登山家なら、非常識な計画、行動が全て常識の範囲になってしまう。池上先生には、冬の厳しい吹雪の中で山（自然）に同化できるマタギの能力が備わっており、それを参加者全員に与える力があつたのではなからうか。私自身が催眠術にかかったのかも知れないが。

1997年6月28～29日、先生にとっては胃の手術後初めての只見町での調査をお願いした。28日の夜は久しぶりの池上先生来町で、松井新教育長も宿においでになり只見町の自然や植物に対する池上の思いが語られた。29日の朝食はゆっくりした時間となる。朝食後も先生の話は尽きず、調査に出たのはお昼を過ぎていた。3班に分かれ、坪谷氏と私は中島などで調査をし午後4時過ぎ帰路につくと、田子倉ダム左岸で池上先生と川端先生がアカメイタヤヤケトチノキの巨木の調査中であつた。先生の姿は往年と変ることなく、伸びたザックを担ぎ、いつもの微笑みのある優しい表情であるが熊の手（爪）は、するどく獲物（植物）を採っている。その後も休むことなく暗くなるまで付近を調査・採集し、川端先生の車は植物でいっぱいになった。これが、先生にとって最期の採集行であつたのではないだろうか。

1991年下田村教育委員会発行の「八十里越の植物」を見て、只見町教育委員会の新国さん（只見町史編集責任者）

から、坪谷さんと私に只見町の植物調査を頼まれ、池上先生にお話すると、「それは引き受けなさい」の一言であつた。新潟県只見町と言われる地で、県外の植物には目もくれなかつた坪谷さんと二人で引き受ける。調査をはじめると、広く豊かな自然、豪雪地只見の特長として尾根沿いのキタゴヨウや冬の季節風と雪崩によりつくられたアパラチ・シュートと呼ばれる地形、黒谷川を中心に発達した畦畔林など新しい発見があり、池上先生の夢が大きく広がり担当の新国さんの構想もふくらむ。刈屋さん、川端先生にもメンバーに加わっていただき、池上先生にも何度が調査や町民への講話をしていただいた。池上先生の御指導で構想をねり、足かけ6年調査をし資料をまとめ、2001年に「只見町の植物（町民編）」を、2004年に「資料編」を発行する。この間に先生は胃の手術をされ、最後の刊行を見ることなくお亡くなりになられたことは誠に残念至極であつた。しかし、この調査がきっかけとなり、只見町のブナ林が世界遺産の候補になり、2005年7月に世界ブナサミットが只見町で開催された。只見町民は当たり前身近な自然に関心を持ち、地元の自然が貴重な自然であることを理解し、町全体の活性化が図られている。先生の夢が、只見町で大きく開花していることは、微力ながら調査に参加した者として大きな喜びである。

大学卒業直前の山本山採集会と只見町調査の思い出を書いたが、それ以外にも、青海黒姫山、頸城菱ヶ岳、光明山、苗場山、飯豊連峰、佐渡、……などの採集会や先生のご自宅の部屋での数々のお話が、すべて懐かしく楽しい思い出として私の脳裏を駆けめぐっています。池上先生「大変勉強になりました。種々の御指導に衷心から感謝しております」「安らかにお眠りください」

## 池上先生有り難う御座居ます

近 田 文 弘

池上先生からは、今日の私にとって非常に重要な、また意味深い教えを頂きました。それは、農学部で学んでいた私を中央の研究者に紹介して、分類学の世界へ導いて下さったことです。そのお陰で、シダの分類学者であつた東京大学農学部の倉田悟先生と地方の植物も研究された国立科学博物館の奥山春季先生をお訪ねする機会を得ました。それが、私が植物分類学へ進む大きな機会になりました。著名な先生方の話と標本の多さに恐れをなしていた私に池上先生は、「なに、たいしたことは無いよ、若い人がやればもっとできるようになるさ」と励まして下さいました。続けて、「日本の標本庫は欧米に比べると本当に貧弱で東大でも国立科学博物館でも、もっと努力しなければいけない状態なのだよ」と話されました。それで大いに気が楽に

なつて、やってみようかな、と思うようになったのです。また、池上先生は野外へ出て、頑張つて植物を採集する、ということをも身をもって教えて下さいました。生来怠け者の私には難しいことで、今もよくできないで居りますが、とにかく押し葉標本にこだわるということをお大切に、この十年間ほど、人生最後の職場の生活を送ってきました。標本を作ることで、いつも池上先生の御姿を思い出すのは、確か最初に採集会に参加した時のことだと記憶しているのですが、海岸に近い砂浜の小さな池の縁でアズマツメクサを見つけた時のことです。「これは珍品であるから」、と先生はやおら風呂敷を取り出してそれにゴソゴソとそれを詰め込んで、ニコニコされているのです。あちこちの研究者に送つてやるのだということでした。その様子